

第79号 (50円)

昭和57年 5月25日

内容

コンピュータと人間..... 1  
 第118回大学共同セミナー.....2~4  
 第3回大学合同セミナー.....4~7  
 国際シンポジウム..... 6  
 法人ニュース.....7~8  
 事業部だより.....8~9  
 わたしたちの会宿..... 9  
 寄付金報告..... 9  
 中国人日本語教師団を迎えて.....10  
 千人会.....11

**セミナー・ハウス**  
**SEMINAR HOUSE NEWS**

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木(☎192-03)  
 電話 0426-76-8511~3  
 振替口座 東京 5-7 459 0番

編集

大学セミナー・ハウス  
 企画室

編集人・中川秀森 発行人・岡山猛  
 製作 中央公論事業出版

私はかねてから、一九八〇年代から二〇〇〇年にかけてコンピュータとコミュニケーション(通信)の融合(以下C&Cという)がいかに重要な意味を持つかについて論じてきた。ご存知のように日本のコンピュータは一九五〇年代にコミュニケーションの技術をベースに誕生した。以来、三〇年間にわたってコンピュータ技術とコミュニケーション技術は比較的個別に発展してきたと考えることができる。しかし、一九八〇年代にはこれら二つの技術の融合による「C&C」技術の創出が全く新しい次元の応用をもたらすことの重要性と、このC&Cの健全な発展が人間社会に及ぼす大きなインパクトと繁栄を予測し、一九七七年のアトランタにおけるシンポジウム(INTERTELCOM77)以来これを主張してきた。現在、私のこの考え方については、国内は勿論、外国においても大方の賛同を得るに至ったと信じている。

すなわち、コンピュータ・システムは単能型、多目的型、集中処理型、分散処理型へと発展し、コミュニケーション・システムは、クロスバー交換、デジタル伝送、衛星通信、電子交換、新サービス網、光通信、総合通信網へと発展し、今世紀末にはこの二つの技術が融合し、新しいC&C技術が創出されるというのである。この二つの技術を支えるコンポーネントがIC(集積回路)、LSI(高密度集積回路)、VLSI(超高密度集積回路)である。この三つの技術が一九八〇年から二〇〇〇年にかけて統合化されるということである。

私はかねてから、一九八〇年代から二〇〇〇年にかけてコンピュータとコミュニケーション(通信)の融合(以下C&Cという)がいかに重要な意味を持つかについて論じてきた。ご存知のように日本のコンピュータは一九五〇年代にコミュニケーションの技術をベースに誕生した。以来、三〇年間にわたってコンピュータ技術とコミュニケーション技術は比較的個別に発展してきたと考えることができる。しかし、一九八〇年代にはこれら二つの技術の融合による「C&C」技術の創出が全く新しい次元の応用をもたらすことの重要性と、このC&Cの健全な発展が人間社会に及ぼす大きなインパクトと繁栄を予測し、一九七七年のアトランタにおけるシンポジウム(INTERTELCOM77)以来これを主張してきた。現在、私のこの考え方については、国内は勿論、外国においても大方の賛同を得るに至ったと信じている。

第118回大学共同セミナー  
 ゲスト講演(要旨)



日本電気会長  
 小林 宏 治

コンピュータと人間

に貢献すべきものである。私は従来X軸上にコミュニケーションの発展を、Y軸上にコンピュータの発展をとり、この二者の関係図を平面でとらえてきたが、新たにZ軸としてM(人間要素)を導入することによって、三次元のC&C空間、すなわちMアンドC&CあるいはC&CアンドM空間としてC&Cの発展状況を表現すべきであると考えるようになった。

や半導体技術と同様にめざましい進歩を示してきた。この間にコンピュータ利用者およびソフトウェアおよびシステム開発者がたどった道程は、人間の概念、思考、行動の標準的なレベルとそれに対応するコンピュータのインテリジェンスのレベルの間に存在する大きなギャップをいかにして縮め、かつその時点時点におけるコンピュータおよび関連ハードウェアをいかに有効に利用すべきかという努力の歴史でもあったといえる。また、今後もより多くの努力が必要なのは勿論である。この道程における人間とC&C

- (1) Minc&C(一九五〇~六〇) 人間が努力してマシンのレベルに合わせて利用した時代
- (2) Monc&C(一九六〇~八〇) コンピュータとコミュニケーションが機能、性能を強化した時代
- (3) Mwithc&C(一九八〇~) C&Cシステムがインターフェースとマンマシン・インタラクションを大幅に向上させて、人間の持つ機能に接近し、人間がC&Cと共存する時代、とくに第三段階以降においては、情報処理技術の高度化はコンピュータとコミュニケーション

さらには一九九〇年代にかけてはC&Cが人間能力へいつそう接近する時代になると考えられる。人間はより創造的な仕事や業務、すなわち知的な仕事に力を注ぐことができるようになるかと期待されている。この時代には、知識情報、人工知能、自然語処理などの実用化が顕著化するだろう。

先日MIT(マサチューセッツ工科大学)のウィズナー博士とC&Cの究極の目的について話したが、それは自動翻訳だということだ。意見が一致した。世界各国の人たちがおのおのの自国語で話したら、相手の国の言葉に自動的に翻訳されて自由に話し合えるようなC&Cシステムである。衛星通信はすでに国境を無くしている。もしこのような自動翻訳システムができたなら、世界の人々が自由に話し合い、戦争のない平和な世界が創られるのではないかと期待している。

この研究開発には今後一〇年、二〇年かかるであろう。私は今七五歳であるが、それまで頑張るつもりである。どうか若い皆さんもぜひ各々の分野で目標達成に努力していただきたい。(文責・編集者)

# 第118回大学共同セミナー

主題——コンピュータと人間

期日——昭和57年3月19日～21日

## △ゲスト講演▽

- I 特別講演—主題に関連して—  
日本電気会長 小林宏治氏
- II 第五世代コンピュータの構想をめぐって  
電子技術総合研究所パターン情報部長 淵 一博氏

## △セクシオン演習▽

- A オフィス・オートメーションとサラリーマン  
産業能率大学教授 魚木五夫氏
- B 工場オートメーションと技術者の役割  
東京大学教授 石井威望氏
- C コンピュータ犯罪  
東京大学助教授 石田晴久氏
- D 情報化社会と家庭生活  
映像情報システム開発協会理事 川畑正大氏

## △運営委員▽

- 成蹊大学教授 黒田道雄氏
- △参加学生▽64名(内女子15名)  
東大(8)、早大(6)、東工大、電通大、産業能率大(各4)、一橋大、津田塾大(各3)、慶大、成蹊大、立大、芝浦工大、横浜商大(各2)、宇都宮大、千葉大、東京学芸大、お茶の水女子大、東京都立大、武蔵大、東京理科大、上智大、法政大、亜細亜大、神奈川大、成城大、東京女子大、日本女子大、青山短大、白梅短大(各1)、その他(6)、合計28校

マイコンの普及、ロボットの实用化などによるコンピュータリゼ

だ基礎研究の段階にあるのに対して、エレクトロニクスはすでに実用化、大量生産段階に入っている。情報の蓄積と処理と伝達という三つの機能を組み合わせることにより、工場、オフィスのオートメーションのみならず、家庭の情報システム化までが現実のプログラムののろうとしており、日本はいまや世界の尖端を走っている。ただし問題がないわけではない。第一に、情報の蓄積と処理には共同研究が不可欠であり、数値計算などは専門家に依頼することになる結果、チェック機能の面で問題が出てくる。研究における人間喪失、数値万能の弊害が出る。第二に、三機能のネットワークをくぐった知能犯罪をいかに防止するかの問題。すでにその面の社会の意外なほどの脆さを示す報告が外国から出ている。第三に、ソフトウェア技術の専門化、高度化に対応しての技術者養成の問題、無人化にともなう失業問題など、社会的調整をどうするか。問題は科学技術のせまい領域をこえており、さまざまな問題関心からの自由な討議を期待したい」

第一日、開講にあたり、黒田道雄氏から今回のセミナーの主題設定につき、大要つぎのような説明があった。  
「世界的経済不振のなかで日本が景気上昇、輸出増大を維持しているのに、コンピュータリゼーションの果たした役割は大きい。いま産業界の将来を左右する三つの新技術——バイオテクノロジー、ニューマテリアル、エレクトロニクス——があるが、前の二つがま

人間の知的性能を知覚、記憶(知識)、思考(推論)、それを媒介する言語とすれば、それらの解明とそのシステム化が当面の目標である。コンピュータを通して、人間とは何かの追求である。従来の数値計算だけでなく論理的操作をこれに加え、機能の高度化によって問題解決に至る、いわば計算から推論へというの大きな方向であり、これは四十年前のコンピュータ出現当時、すでに「電子頭脳」という表現で考えられていたことである」  
話はさらに現在、実験開発中の人工知能のパラダイム(範例)に入り、七〇年代以降の最大の課題の一つ、自然言語の理解、知識工学の開発に及んだ。  
「速く正確に論理式言語をハード屋でつくる時代が来つつある」という未来予測も語られ、それらをめぐって熱の入った質疑応答がつけられ、このセミナーにふさわしい幕開きとなった。

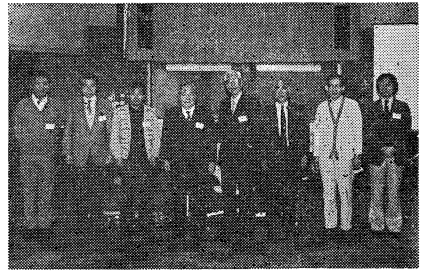
## ◇

夕食のあと、各指導教授によるテーマ解説を主眼とする「共通セッション」をもって第一日は締めくくられた。以下はその折の教授諸氏の話の要約である。

### ◇魚木五夫氏——

二三年前、私は初めてコンピュータを使った。最初にゼロ世代の代物で、真空管の出る前のものだ。説明書どおりはなかなかうまく動かない。「ともかく動かしてみてほしい」と書いてある。(笑)私のようにコンピュータをずっと使っている人間から見ると、使っていくコンピュータほど愛着があるので、逆にコンピュータに人

間のほうが振り廻されるようになって、これは困った存在だと思ふしがある。たとえば、オフィス・オートメーションの尖端を切った道具の一つはタイプライターだが、これは一八七六年、アメリカのファイデルフイアの万博で初めて披露された。その結果、二〇年後のアメリカでどういうことが起こったか。アメリカ人の手書きの字が下手になったのだ。これは一つの例であって、これに類する問題がオフィス・オートメーションにもなっている。起る。もちろん、これには困る面と困らない面がある。オートメーションの代表的機械であるワード・プロセッサの場合でも、もとの辞書が間違っていたため、ミス(誤記)の大量生産といった事態が現に起こっているという。扱う技術者は困らないからミスにも気がつかない。問題は、技術者が育たなくなってきたということだ。新人の技術者は、コンピュータにインプットすることは覚えてくる。インプットすれば、だいたい適切な結果がアウトプットされてくると思い込んでいて、なぜという過程を教わらないし考えるチャンスもない。したがって、新しい問題、新しいケースに対処して考える能力を身につける。現在書店に氾濫しているOA関係の本にも、こじしたマイナスイ面を扱ったものがほとんどない。コンピュータがニーズに先行して走っており、ユーザが後追的に考えて、なんとかうまく問題解決をはかっているというのが現状だと思ふ。昔、手計算の時代に考え出した



右より黒田、魚木、水野、飯田、小林、石田、石井、川畑の諸氏（講堂）

こるだろうと言書いたところ、  
たまたまそれが事実になり、予言  
者扱いされたりして、こんな役廻  
りになって、早く足を洗いたいと  
いうのが私の偽らざる気持だ。

コンピュータの急速な普及にと  
もなう弊害のいくつかがすぐ思い  
当たる。第一に、人間と人間の対  
話が失われるということだ。これ  
は現に日本のある新聞社の例だ  
が、そこでは新聞製作を全部コン  
ピュータ製作に切り換えたため、  
社員一人一人がコンピュータに向  
かって仕事をし、人間同士の  
の会話がない。一種異様な感じに  
なっている。第二は、これはアメ  
リカで起こっていることだが、電  
子郵便の悪用である。会社の電子  
郵便が個人間の私用に使われた  
り、組合本部から組合員への通信  
に使われるといったことに対する  
適切な防止策がなかなか見出しに  
くい状態にある。こうした状況  
は、マイコンの使用がふえ、プロ  
グラムを扱える人がふえるにつれ  
ての拡大化も予想され、現在は金  
融機関に限定されている犯罪が、  
もっと広い場所で行われることが心  
配されている。

◇石田晴久氏——  
私の専門は大型計算機である。  
ではなぜコンピュータ犯罪の問題  
を扱うようになったか、そのあた  
りから始めよう。一九七〇年にア  
メリカで「コンピュータ会議」が  
あり、そのなかで行われたパネ  
ル・セッションで一番人だかりの  
する講座を私も覗いた。それがド  
ン・B・パーカー（スタンフォード  
研究所）のコンピュータ犯罪の  
講座だった。そこで聞きかじった  
いろいろな手口を、帰国後ある会  
合で座席に話をしたのがある出版  
社に伝わり、書いてくれという。  
いずれこうした犯罪は日本にも起

るだろうと言書いたところ、  
たまたまそれが事実になり、予言  
者扱いされたりして、こんな役廻  
りになって、早く足を洗いたいと  
いうのが私の偽らざる気持だ。

って予想される、家庭における情  
報ニーズの増加、多様化の問題に  
しても、いわゆる在宅勤務につい  
てのアンケート調査の結果は、女  
性の大部分の人がこれに反対して  
いる。夫の在宅勤務がふえ、在宅  
時間がふえるにつれて離婚がふえ  
るという予測も出ている。一方、  
アメリカで行われた Death in the  
Family という面白い実験報告も  
ある。一ヶ月間、家庭からテレビ  
を取り払って観察した結果、家庭  
はまことに殺伐としたものになっ  
たという。今までのテレビ批判で  
言われていたことと事実は逆で、  
テレビが家族間の話題をつなぎ、  
団らんの原因になっていたことを証  
明したというのである。ことほど  
さように家庭の情報化問題はむず  
かしい。このセッションでも、で  
きるだけビデオテープを使って、  
情報機器がわれわれのコミュニケ  
ーションにどんな役割を果たし  
るかの一つの実験を試してみたい。

◇川畑正大氏——  
家庭の情報化によって人間生活  
はどういう影響を受けるかはな  
かむずかしい問題である。そも  
そも家庭にとって情報化がいいの  
かわるのか、いろいろ議論があ  
るわけだ。私はいま、あるニュー  
タウンに今までなかったような情  
報ネットワークをつくり、家庭の  
人がそれにどんな反応を示すか、  
一つの社会実験をやっているとい  
うのだ。

たえば職業の専門化にともな  
って予想される、家庭における情  
報ニーズの増加、多様化の問題に  
しても、いわゆる在宅勤務につい  
てのアンケート調査の結果は、女  
性の大部分の人がこれに反対して  
いる。夫の在宅勤務がふえ、在宅  
時間がふえるにつれて離婚がふえ  
るという予測も出ている。一方、  
アメリカで行われた Death in the  
Family という面白い実験報告も  
ある。一ヶ月間、家庭からテレビ  
を取り払って観察した結果、家庭  
はまことに殺伐としたものになっ  
たという。今までのテレビ批判で  
言われていたことと事実は逆で、  
テレビが家族間の話題をつなぎ、  
団らんの原因になっていたことを証  
明したというのである。ことほど  
さように家庭の情報化問題はむず  
かしい。このセッションでも、で  
きるだけビデオテープを使って、  
情報機器がわれわれのコミュニケ  
ーションにどんな役割を果たし  
るかの一つの実験を試してみたい。

◇石井威望氏——  
生産工場の特徴的傾向の  
一つは多品種少量生産だというこ  
とができる。FMS (Flexible  
Manufacturing System) の時代  
ともいわれる。コンピュータのよ  
うな電子機器の開発によって、今  
まで人間の頭脳が受けていた  
記憶とか判断能力に近い機能を機  
械が果たし、フレキシブルに作業  
できるようになったということ  
だ。今までは情報処理の分野を受  
けもった電子技術が最近では機械  
の制御、つまりメカニクスの分野  
にまで幅をひろめ、メカニクスと  
エレクトロニクスの両機能を兼ね  
るロボットのようなNC機械（メ  
カトロニクス）が出現した。ちな  
みにメカトロニクスは全くの和製  
英語だが、このことばも今や欧米  
に逆輸出されつつある。

◇石井威望氏——  
生産工場の特徴的傾向の  
一つは多品種少量生産だというこ  
とができる。FMS (Flexible  
Manufacturing System) の時代  
ともいわれる。コンピュータのよ  
うな電子機器の開発によって、今  
まで人間の頭脳が受けていた  
記憶とか判断能力に近い機能を機  
械が果たし、フレキシブルに作業  
できるようになったということ  
だ。今までは情報処理の分野を受  
けもった電子技術が最近では機械  
の制御、つまりメカニクスの分野  
にまで幅をひろめ、メカニクスと  
エレクトロニクスの両機能を兼ね  
るロボットのようなNC機械（メ  
カトロニクス）が出現した。ちな  
みにメカトロニクスは全くの和製  
英語だが、このことばも今や欧米  
に逆輸出されつつある。

◇石井威望氏——  
生産工場の特徴的傾向の  
一つは多品種少量生産だというこ  
とができる。FMS (Flexible  
Manufacturing System) の時代  
ともいわれる。コンピュータのよ  
うな電子機器の開発によって、今  
まで人間の頭脳が受けていた  
記憶とか判断能力に近い機能を機  
械が果たし、フレキシブルに作業  
できるようになったということ  
だ。今までは情報処理の分野を受  
けもった電子技術が最近では機械  
の制御、つまりメカニクスの分野  
にまで幅をひろめ、メカニクスと  
エレクトロニクスの両機能を兼ね  
るロボットのようなNC機械（メ  
カトロニクス）が出現した。ちな  
みにメカトロニクスは全くの和製  
英語だが、このことばも今や欧米  
に逆輸出されつつある。

理方式も従来のままでは役立たな  
い。出てくるものも目方ではかれ  
るものでないから厄介だ。そう  
なると一番大事なのは、やる気、  
本人のモラルで、この点では日  
式経営の長所を生かせる場ではな  
からうか。情緒的結合というか、  
ことば以前の、ノンバーバル・コ  
ミュニケーションが大切な場では  
ないかと思う。

◇ある啓蒙  
一橋大学法学部四年 高橋 裕  
私はこの共同セミナーに参加す  
る以前には、コンピュータという  
ものに対して漠然たる不安感、い  
やそればかりか共同セミナー終  
了時の中川秀恭館長のお話にもあ  
つたことだが、コンピュータの前  
に人間が空洞化してしまっている  
ことをやめてしまおうのではない  
だろうかという恐怖感をも抱いて  
いる。(次ページ4段めへつづく)

◇ある啓蒙  
一橋大学法学部四年 高橋 裕  
私はこの共同セミナーに参加す  
る以前には、コンピュータという  
ものに対して漠然たる不安感、い  
やそればかりか共同セミナー終  
了時の中川秀恭館長のお話にもあ  
つたことだが、コンピュータの前  
に人間が空洞化してしまっている  
ことをやめてしまおうのではない  
だろうかという恐怖感をも抱いて  
いる。(次ページ4段めへつづく)

### 第3回大学合同セミナー

#### 主題—現代における民主と独裁

—一九三〇年代と一九八〇年代—

期日—昭和57年3月5〜7日

#### ハセクシヨン演習V

A 日本型ファシズムの特質—なぜ独裁が民主に勝利したのか—

法政大学教授 松尾章一氏

B ナチスと現代ドイツ—社会・文化における連続と断絶—

立正大学教授 村瀬興雄氏

C 米国民主政治の特質—同質と多元—

日本女子大学教授 清水知久氏

ラテンアメリカにおける「民主と独裁」—メキシコの政治体制をめぐって—

青山学院大学教授 加茂雄三氏

D ソ連と北欧—東欧

津田塾大学教授 百瀬 宏氏

E 中国革命における相克—独裁か民主集中か—

成蹊大学教授 宇野重昭氏

△運営委員V

立正大学教授 村瀬興雄氏

成蹊大学教授 宇野重昭氏

△参加学生V45名(内女子18名)

成蹊大(16)、津田塾大(8)、法政大(6)、立正大(5)、上智大(4)、早稲田大、明治大(各2)、神奈川大、日本女子大(各1)、その他(2)、合計9校

◇

歴史はくり返すのであろうか?

一方ではファシズムの時流に、他方では民主主義と社会主義の運動に、若者を駆って走らせた一九三〇年代からここに半世紀、現代世界の動向をそれと対比してどう

とらえるか、そこに織りなす光と影を幅ひろく考えてみたいというのが、今回の合同セミナーの目的だった。幸いに村瀬興雄、宇野重昭両氏には運営委員として企画から実施細目に至るまで細かいご指導をいただき、九大学、四五人の参加を得、各指導教授ごとの事前指導を経たのち、前記のとおり合同セミナーの実現となった。

開講にあたり、村瀬氏より今回の主題設定についての説明がなされたが、とくにテーマを「民主制と独裁制」としなかったこと、そして、問題を単なる政治制度論としてとらえるのではなく、そこに生活を守りかつ向上させようと願う民衆の本能的な動きや習慣までをも汲みこむことよって問題をより幅ひろく自由に論じたいからだと説かれたのが印象深かった。

第一日は開講式のあと、夕食をはさんで各セクシヨンの指導教授による全体講義が大学院セミナー館で参加者全員を相手に行われた。それぞれ教授がその問題点とするところを説明し、参加者からの質問に応じた。以下はその要旨である。

◇

A セクシヨンの松尾章一氏は、戦前の近代天皇制国家の性格規定から始まり、第一次世界大戦を契機とする独占資本の確立、絶対主義国家権力内部における上からの

ブルジョア革命の進行という時代状況の中から、一九三〇年代に誕生した日本型ファシズムの特質を考えたとして、次の三点をあげられた。①ドイツ・イタリアに見られるような、ファシズム政党の大衆的支持のもとでの政権の奪取ではなく、軍部の力の再編成という、いわば上からのファシズムである。②成立の契機としては、国内の民主的勢力への対抗よりも、外国とくにソ連への脅威感が大きく作動した。③戦争と密接不可分の関係にあり、国家総力戦体制の確立、共産主義勢力の撲滅に主眼がおかれた。

一九八〇年代の時代状況が以上の戦前ファシズム国家復活の兆しをはらむとして、松尾氏はここ数年間に見られる政治・経済・文化・教育などあらゆる面からの総合反動の動き、軍国主義でも戦前型ファシズムでもない、新しいファシズム出現の動きをあげ、中道革新の役割などをとくに注目しなければならぬと説かれる。

質問者のなかから、①日本ファシズムは戦争遂行のために不可避なものと思われぬか。単に上からの強制だけでなく、民衆のファシズム参加はなかったか。逆に反ファシズム闘争における民衆参加があったか、なかったか。②八〇年代のファシズムは何を契機にして何を対象にして何を必要として起りつつあるのか。アメリカの核の傘下にあることの不安が一つの要因になっていないか、などの問題提起がなされた。

B セクシヨンの村瀬興雄氏は、一九三〇年代に学生としてエンゲ

(前ページよりつづく)

たのである。ところが一方では、コンピュータによって人類はバラ色の未来を約束されているのではないかと、密やかな期待感も持っていた。

しかし共同セミナーを終わって感じたことは、コンピュータともさほど恐るべき存在ではないというところであった。またそれと同時に、コンピュータが出てくればそれですぐさますべての問題が解決するわけでもないということも感得した。これはコンピュータというものについて多少なりとも知識を得た結果であろう。ある物に



卒業を前に中川館長からはなむけのことばを受ける学生諸君(食堂)

ルスの強調する「ドイツ労働者階級の健全性」について懐いた疑問、また「ファシズムは狂気の産物」と断ずる四五五年ごろのニューロンベルグ裁判や東京裁判などの見方への疑問から発し、ほぼ五〇年にわたるドイツ史研究の上で、七〇年代にドイツの若い研究者の間で起こった「民衆の現実生活の中からファシズムの実態究明を」という動きへの最近の関心を語られる。そして、ナチスの支配下になってもドイツ社会の多元性は維

対する過剰な恐怖や期待は多くの場合、その物に対する無知に由来するものである。

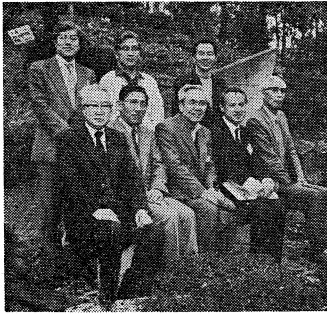
コンピュータも機械である以上故障が起こることは自然であるということは素人の私には驚きであった。さらに工場へのロボットの導入が必ずしも労働者の失業に繋がるものではないということなど私の謂なき恐怖感を一掃するに充分であった。また、オフィスへのコンピュータの導入は経営工学的改革を前提としてその延長線上に位すべきものであることや、日本における工場オートメーションの成立にはいづゆる「日本の経営」が大きく与っていることなどは、コンピュータに対する盲目的信仰に陥ることを防いでくれたし、コンピュータ犯罪の発生など、コンピュータの普及によって新たに生じてきた問題は、コンピュータの便利さに溺れることから救ってくれた。

以上のように私は大いに啓蒙された。かくも爽り多い機会を与えてくださった方々に私は心から感謝したい。

持されておられ、そのなかで民衆は自分の生活を守るにはしどろい打算と抵抗をつづけており、それに対するナチス党組織の力は意外に脆弱で、古い支配勢力、圧力団体や利益団体の活動を黙認せざるをえなかったというのが実態だとする。また、第三帝国の失政や蛮行についても、むしろドイツの古くからの支配勢力がそこに大きく働いていたことへの正しい認識、歴史における連続と断続の確かな見究めの必要を指摘された。

質問者のなかから、①中進国の強引な近代化は不可避的にファシズムを生むのではないか。②ナチス戦犯は西ドイツで今でも継続して追及されており、日本とは事情が違う。日本型とドイツ型の相違をあらゆる面から明らかにすることによって今後の課題を考えるべきだ、などの問題提起がなされた。

Cセクションの清水知久氏は、アメリカは、トクヴィルの評したとおり「多数者による専制」の国、史上初めての大衆民主主義の国であって、ここでは議会制民主主義と独裁とはかならずしも相容れないものではない。現代のアメリカにおいては、行政府権力、とくに大統領権力の肥大化、軍産複合体やCIAなど、見えざる政治権力による政治支配、独裁化がすすんでおり、民衆のなかには、下からの自発性、疑似自発性にもとづくファシズムを生む要素と、差別されている人民層を中心とする民主、反独裁に向かう要素とが並行して存在していると指摘される。また、将来的展望として、や



右から前列坂田、宇野、村瀬、加茂、岡山、後列清水、松尾、百瀬の諸氏

がて五〇年先ぐらには五つぐらいに分割しての北アメリカ共和国連邦と割った、ゆるやかな連合政府などを構想してみることを提唱される。

質問者からは、核戦争反対運動の性格、人種差別思想とナチス的人種思想との異同等などについての疑問が提出された。

Dセクションの百瀬宏氏は、まず現在の国際問題をめぐる諸評論に見られる一般の傾向として①国際無関係論の視角と、②歴史の視野の欠如をあげ、例証として「ソ連の脅威」観を分析、それがいかにかに学問的客観性から遠いものであるかを説かれる。一九二四年における一国社会主義理論によるスターリン体制がナショナリズムによる工業化のための大衆動員体制であったこと、フルンチョフによるそれからの転換とその後の再転換をどうとらえるか、その歴史的観点としてソ連指導者の内に見られる、自国の急速な発展についての自信喪失を指摘、いまや社会主義国の経済市場は資本主義国側の市場に屈服した形となっており、この上各各方面でのコンプレックスが、かれらの軍事力への依存、暴走をもたらししているとし、そうした観点からの「ポーランド問題」「フィンランド化」理解を説かれる。

Eセクションの宇野重昭氏は、まず中国人にとつての国家とは何か、伝統的に家庭、血縁、地縁を重視してきたその独特な民衆的社會と、民生向上を前提としてそこに根づいた徳治主義を指摘される。一方、西欧および日本の侵略に対抗する必要から富強國家をつ

くらねばならないし、そのための強力な指導体制は民衆側の自由の制限を要求する。国民党ついで共産党が西欧民主主義とは性格の異なる大衆動員によって自力更生への道をすすめたのが一九三〇年代の中国である。現代でも中国民衆は自由よりも生活の向上に関心をもち、国家機構そのものには余り興味を示していない。共産党独裁に対しても民衆はそうした計算に立っている、と述べられる。

質問者との応答のなかで、氏はまた文化大革命を狂気の時代とみることに反対、民衆の信条や生活のなかから内発的可能性を引き出す延長線上に今後の民主主義の展望をつかんでいきたいとの所信を示される。

かくして夜更けまでの全体講義を終え、大学院セミナー館から各自宿舎に向かったのは22時をしばらく過ぎてからであった。

◇ 第二日、昼食をはさんで午前中三時間、午後四時間、都合七時間にわたるセクション演習が各セミナー室でそれぞれの担当教授を中心に行われた。日本、ドイツ、アメリカ、メキシコ、ソ連、中国と、研究対象別の質疑と討論である。

夕食後には全員が大学院セミナー館に集合して、いよいよ交流ゼミである。この交流ゼミでは、まず各セクションの代表学生によって、この日の演習のあらましとその主要な論点の報告がなされ、それへの質疑応答ののち、全参加者が自分の所属セクションから離れて、自分の希望する別のセクション演習に参加するシステムであ

る。これにより、同じ民主と独裁の問題を、少なくとも二つのグループ、二つの地域研究をダブらせて討論でき、地域による個別性と地域をこえての共通性の把握という、よりグローバルな視野を身につけることが期待され、事実これが確認されたことは大きな収穫である。

なお、交流ゼミに先立ちCセクション担当の加茂雄三氏が前日の全体講義に欠席のため、あらためて講義、大要つぎのような問題提起をされた。ラテン・アメリカでは民主と独裁の現れ方が欧米や日本とかなり異なっている。テグナクラートと軍事政権とが結びつく権威的体制もしくは権威的組合國家が多い。しかも西欧流の民主化への傾向は成長せず、アメリカへの従属が深まるなかで、より根本的な構造改革が求められている、と。

◇ 第三日はいよいよ全体会での総括討論である。学生委員が中心となり、全員で会場の設営をする。議長を中心に、各セクションのレポーターが正面に陣取り、教授諸氏は脇に傍聴の形となる。

レポーターの報告およびそれをめぐっての討論は活発、さまざま意見の交流がなされた。紙幅の関係でその内容に触れえなないのは残念だが、とくに印象に残った論点のいくつかをここに紹介する。

①民主が独裁か。これを対立概念としてとらえることが真の問題理解につながるかどうか。民主主義が独裁制をはらむことがあるかどうか。在来の善玉悪玉論的思考から脱却すべし。②民衆が自

らの願望として、生活向上のために独裁を求めることはありうる。しかし、独裁体制のもとで、民衆の志向が変化したとき、体制側がそれに対応する柔軟性を保障しうるか。③独裁制の成立に占める国際環境の影響力をもっと重視すべし。④中国およびラテン・アメリカに見られる独自の民主主義または独裁制の本質と発展可能性に注目すべし。⑤ナチズム下のドイツ民衆のしぶとい抵抗をあらためて見直すべし。

◇ 全体会を終え、最後は反省会である。ここで各指導教授から述べられた感想をつぎに要約する。

松尾氏—ブルジョア民主主義とファシズムの問題を今日の観点でもう一度考えるいい機会だった。近代天皇制を考える際はとくに最も差別され虐げられている階層の人々や民族の立場に身を置くことを忘れないでほしい。

村瀬氏—今までにない観点も教えられた、ありがたかった。民衆生活を支える伝統の重さ、そのプラス面とマイナス面を、また民衆の目から歴史をみるこの意味を強調しておきたい。

加茂氏—民主と独裁の問題をみる場合、先進国と発展途上国の関係、国際環境との関連からとらえる視点を身につけてほしい。近視眼的視点をしばられず、時に五〇年ぐら先のヴィジョンをめざし、それに向かっていくといった学問的追求の姿勢がほしい。

百瀬氏—若い諸君が民主主義や社会主義にどんなイメージをもっているのか知って、たいへん勉強になった。既成概念にとらわれぬ

自由な発想は必要だが、それにしても昨今の無思想な評論には危機感をもつ。

宇野氏—中国研究者は怠け者になる暇がない、といわれるほど、中国の変貌ははげしい。中国理解に先入見は禁物。中国社会に一贯してみられる草の根民主主義、伝統社会との関連において民衆の選ぶ変革コース。やがてイデオロギー国家を揚棄することを目標とする、その歴史的経験の重さを知ってほしい。

◇ 本セミナーでは予想したことが、民主と独裁についての統一見解を得るようなことはなかった。しかし、参加学生はおのおの自分の今まで持っていた固定観念から脱し、ある距離をもって、もう一度考えてみる視点を得たのではないだろうか。大学の壁をこえたこの三日間の交流の経験が明日からの各人の勉学のげみとなり、やがてまた、さらに進んだ交流へと自主的に発展することを期待する。

以下に、参加学生から寄せられた感想の一、二を紹介しよう。

甘えた話

早稲田大学文学部二年 有馬久恵

流れるように毎日が過ぎていく。核のカサの下といわれる日本。反核運動は世界の各地で行われている。新聞を読み、大国のくだらないエゴに怒りを感じることもある。しかし、その怒りの強さが継続しない。世の中でおこっている大きな出来事よりも、自分にとって関わりを持つ身近な問題のほうがずっと重大事に思えて、小

さな世界の殻に閉じこもってしまふ。危険だと知りながら、大きな脅威には鈍感に生きている人が、私を含めて、身のまわりになんともいことだろう。

私の参加した合同セミナーのタイトルは「民主と独裁」だった。時間をできる限り有効に使おうとしたスケジュール。夜の10時過ぎまで演習が行われる。二泊三日でしかないが、一つのテーマに真剣に打ち込める雰囲気がいい。新しい見方がどんどん飛び込んでくる。食事の時や夜、他大学の人と交わす雑談が息抜きになる。交流ゼミによって自分が話し合ってきた国（私の場合ドイツだった）と別の国についての未知の部分を知ることまでできる。充実していた—そんな実感が湧いてくる三日間だった。

だが私はここで何を得たのだろうか。何が民主で何が独裁なのだろう。独裁と言われているものがすべて悪だと言えるのだろうか。いまだどうすることが正しく、私にできるのは何なのだろうか。結局、心の隅に押し込めていた混乱が表面化してきたということだ。

私は善が何なのかをセミナーに求めていたように思う。しかし考えてみれば甘えた話である。自分の進むべき方向性を他から得ることを期待していたのだから……。セミナーは私の知識を広げ、種々の角度からの見方を教えてくれた。そこから先は私が考え創っていかなくてはいけないことだ。

もう一度の開講を

立正大学文学部二年 伊藤美知子

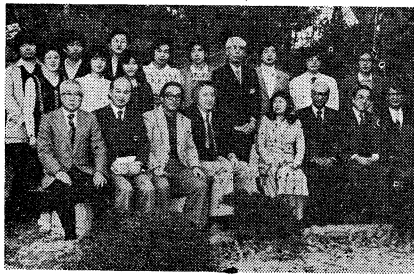
国際シンポジウム  
ヨーロッパから見た  
中国とその国際環境  
昭和57年3月23日

去る3月23日、当ハウス内の大学院セミナー館で、国際プログラム委員会主催の国際シンポジウムが開かれた。ささやかながら外人研究者を迎え、中国問題をめぐっての活発な意見の交換がなされた。以下は参加者の一人、東京外国語大学研究生加藤光利氏による要約紹介である。

国際プログラム委員会主催の、現代中国を主題にした国際シンポジウムが去る3月23日開かれた。来日中の全フランス政治学財団国際関係研究センター中国・極東部主任研究員クロード・カダール氏と夫人のインシアン・カダール同研究員をゲストとし、同じく滞日中の英リーズ大学モンゴル研究室長オノン・ウルグンゲ氏および中国問題にくわしい在京のインテリ外交官を招き、日本側からは徳田教之筑波大学教授、宇佐美滋東京外国語大学教授がデイスカッショントとして参加、司会には国際プログラム委員会委員長中嶋嶺雄氏自らが当たり、当日の来会者に、たまたま合宿中の東京外国語大学学生も加わっての討論である。大学院セミナー館にふさわしく、学究

的雰囲気にも充たされた交流、交歓の一刻であった。

飯田名誉館長の挨拶の後、まずインシアン・カダールさん（中国系フランス人）から現在の中国国内の動きにつき、指導層レベルと民衆レベルの両面からのきめ細かい分析の必要が説かれる。中国内の「民主化運動」は大変関心の持たれるトピックではあるけれども、これら指導者層と草の根（民衆）に二分して捉えるのでなく、トップ・レベルの意思決定に見られる不統一とともに、民衆の中にも見られる知識人・都市労働者と農民との間の、現状に対する不満やそれへの対応における差異に着目すべきだとの見解を述べられる。新しい民主化運動への指導層による抑圧には、改革と保守の二



参加者と共に、前列左より2人置いて中嶋氏、カダール氏夫妻（ようこそ広場）

私にとって他大学との合同セミナーは初めての経験だった。ついていけるかどうかの不安だけが頭にあって一日めは緊張の連続、気がついたら二〇ページほどのノートに何やら書きなぐっていた。二日

極間の振動が端的にあらわれているとの指摘もされた。

また、これら一連の動きをフランス国内ではどのように見ているかの問題を、クロード・カダール氏も加わって議論した。具体的にあげられた反体制グループの魏京生や北京駐在フランス外交官の婚約者、李爽嬢の逮捕事件へのフランス知識人の強い抗議や減刑要求運動の盛り上がりは、同様の問題に直面しての日本の知識人の反応との違いを考えさせる発言であった。フランスは日本と同じく、かつて文革期に毛沢東主義に強く影響を受けた人々が多かっただけに「四人組」以降の両国知識人の反応の違いをめぐって、学生をふくむシンポジウム参加者から活発な質問が繰り返された。

ついで中国を取り巻く国際環境、とくにカンボジア、アフガン事件以降の米中「協力」などが論議にのぼったが、オノン教授による漢民族の膨張主義についての鋭い問題提起も強い印象をわれわれに残した。

シンポジウム散会の後、交友館・遠来荘に場を移し、ささやかではあるが、フランス、中国、モンゴル、インドをそれぞれ日本と、国籍をこえての、文字どおりの楽しい国際プログラムの経験から大きな感銘を受けた一人として関係者の方々に感謝したい。（加藤光利氏）

めは、それだけ視野もひろげられる、またとない刺激である。また私の専攻のドイツ以外の国について、同じアジアズムといっても、かなりの見方の違いがあることを知ったのは驚きである。何

法人ニュース

第49回評議会  
第30回評議員会

昭和57年3月26日/学士会館

〔出席者〕

△理事 茅誠司、村井資長、川喜田愛郎、中川秀泰、永井道雄、飯田宗一郎、平野龍一、岡山猛  
△監事 隅谷三喜男  
△評議員 大東百合子、鈴木幸寿、川原栄峰、伏見康治、小川芳男  
委任状による者 理事九名、評議員六九名

茅理事長の開会挨拶の後、平野理事に理事長に代わっての議長長任を委任したい旨の理事長提案があり、全員の承認、選出により、平野理事が理事会・評議員会合同会議の議長となる。以下各議案について岡山専務理事より逐次説明があり、それぞれ質疑応答の後、賛成多数で承認可決された。

▼協力会員校の加入について  
新たに加入申込のあった立正大学、明星大学、杏林大学の加入を承認可決。

▼評議員の人事について  
協力会員校の加入および学長交代にもなる左の評議員人事を承認可決。(カッコ内は退任)

立正大学・菅谷正貫氏、明星大学・児玉三夫氏、杏林大学・山本郁夫氏、お茶の水女子大学・藤巻正生氏(井上茂氏)、明治学院大学・森井真氏(平出宣道氏)、以上五名の新任。

▼昭和57年度事業計画案について  
これに関連して飯田理事より去る第48回理事会議事録中、開館10周年記念募金残金三〇〇〇〇円余の扱いに関する箇処に不適当な記載があり、その決定内容に反対する旨の発言があったが、これに対して専務理事、事務局側よりなされた説明ならびに議事録につき、とくに訂正の必要なしとの議長発言が賛成多数で承認され、ついで当議案件に多数を審議の結果、賛成多数で承認可決された。これにより、今年度の協力会員校会費は据え置き、利用料金も宿泊料、施設使用料の一部改訂を除きほぼ据え置き、いっそうの利用促進につとめるなどの基本方針が確認された。

▼昭和57年度収支予算案について  
審議の結果、原案が承認可決されたが、そのさい隅谷監事より今後収支予算書の作成においては①各費目の前年度比増減理由の記入、②予算対比のみでなく決算見込額の記載をするよう要請され、事務局より実施の約束がなされた。なお、収支予算の概要については本紙次号に報じたい。

▼飯田名誉館長に対する館長補佐職務の委嘱について  
前年度と同じ内容の職務を今年度も引き続き委嘱したい旨の理事長提案があり、承認可決された。

以上の議事のほかには村井理事より、かねてから賃金制度改訂を中心に法人経営全般につき検討を依頼中のコンサルタント小林大作氏により近く理事長あて答申書が出されるのを待って、経営の積極的改善策樹立を図りたい旨の常務理事会の意向が報告された。

昭和56年度  
第3回共同セミナー  
委員会

昭和57年3月12日/私学会館  
56年度最終の委員会は3月12日18時より、別記の委員一三名の出席の下に開催された。欠席の岡委員長にかわって、議事は野田副委員長によって進められた。

まずはじめに、第115、117回大学共同セミナーの実施報告が、それぞれ岡山専務理事、山岸委員、飯田主事から、また第2、3回大学共同セミナーについては、それぞれ山岸・田中西委員、岡山専務理事から行われた。とくに昨年3月につづいて11月に連続して実施した第2回合同セミナーは、学生レベルの連絡委員も生まれて、近い将来これを自主的な合同セミナーに発展させる基盤もできつつある、との報告があった。

つづいて3月後半の第118回大学共同セミナーの準備状況の報告が黒田委員からなされたあと、昭和56年度年間プログラムの総括が資料に基づいて主事より行われた(セミナーの開催状況・参加状況などの総括報告は次号に掲載予定)。

次に、昭和57年度計画に移り、まず次年度セミナーの学生の参加費を五〇〇円アップして九、五〇〇円としたいという説明が、共同セミナーの予算に基づいて岡山専務理事よりなされ、国庫補助金運用の基本的な考え方をめぐり若干の意見交換がなされた。

つづいて、すでに企画の準備が進められている第119回大学共同セミナー、第4回大学合同セミナー

および第3回大学院共同セミナーについての経過報告が企画室を中心として行われたあと、今回の主たる議題である第120、121回大学共同セミナーの企画についての協議に入った。

第120回(11月12、14日)、第121回(12月17、19日)大学共同セミナーについては、これまで委員会では懸念となっていた、これまでのテーマから準備のとのいた次第、順次実施することに決まった。

「人間はどこまで攻撃的か」(運営委員・尾本恵市氏)  
「地域研究—方法論の周辺—」(運営委員・小浪充氏)  
「地球と太陽」(運営委員・芳野越夫氏) (以上いずれも仮題)

〔出席者〕 野田春彦、山岸健、黒田道雄、坂垣雄三、熊坂敦子、小田晋、島美喜子、原田敬一、阿部謙也、尾本恵市、小浪充、田中義久、芳野越夫(敬称略)

国際プログラム委員会  
昭和57年2月18日/私学会館

56年度総括のための委員会が、別記九名の委員の出席に加え、日本国際教育協会から二名、当ハウスから中川館長、飯田名誉館長ほか関係者数名が陪席して開催された。まず、前年(55年)度に開催を見送り、56年度に再開した国際学生セミナーの第8回「文化接触と日本へ移入と創造」について、三輪運営委員長から以下の報告がなされた。

総合テーマ「文化接触と日本」のシリーズ最終回として「移入と創造」を設定したが、こちらの意

✓今今まで持っていた狭い固定観念が音を立てて崩れていく感じだった。

最初の緊張も解け、みんなの討論にひきこまれていくうちに、気がつくとも多くの新しい友人ができていた。二泊三日が短く感じられる充実した時間を送り、本当にいい経験だった。セミナー、これからは積極的に取り組むたい気が、いま私の中に深まっている。おのがさらに考えを煮つめ、勉強をすすめた上で、もう一度討論する機会を得たら、このセミナーの意味はもっと大きいものになるだろう。その日の来るのを楽しみに待ちたい。

企画室の立場から飯田主事の補足説明があり、今後の課題としては、とくに留学生の募集については、一層の努力と工夫が必要だとの意見が述べられた。また、国際教育協会の黒岩断子氏からは、数は少なくても、集まった留学生は積極的に、自ら意欲的に参加していた、との発言があった。

次に昭和56年度の国際交流プログラムとして、中嶋委員長から、フランス人夫妻でたまたま滞日中の現代中国研究家を迎えた国際シンポジウムを年度内に企画したいとの提案が出され、全員これを賛成承認。同委員長と企画室の間で準備を進めることになった(この実施報告は別掲のとおり)。

(次ページ3段めへつづく)

●事業部だより

57年2・3月

冬から春へのキャンパス

●2月1立春で戻る活況

学年末試験など大学特有の事情から閑散の日が多かった1月が明けて、2月も立春を迎えると、当ハウスに嬉しい活気が戻る。例年のことだが、ゼミもサークルも学生の終わりに向けて締めくくりに合宿を実施する。卒業組は大学生活最後の合宿で卒業研究の成果と苦勞を学友と分かち合う。教師と学生との人間的交わりが、いっそう深められる季節である。東京農大・岩崎ゼミの卒業組が、自分たちで栽培したケヤキやクルミの苗木計四〇本を構内各所に記念の植樹をしてくれたのは、一昨年この時期だった。今年も同ゼミの合宿で二泊された岩崎代志治教授は、その苗木の一つひとつを見て廻り、(自ら外出、購入してこられた)肥料を施しておられたが、そのような情景にも、師弟間に通うあたいたかい心を偲ぶことができた。

また、今年2月は、韓国、オーストラリア、そして下旬から3月にかけては中国と——海外から相当数の教師や学生を迎え、国籍を超えた人間交流も繰り広げられている。この月の合宿件数は一〇一、宿泊者は延べ四、七九一人におよぶ。この利用者数は2月の最多記録となるが、当ハウスは昨年にかけて二年連続、厳寒の2月に

月間四、七〇〇人を超す方々をお迎えてきたことになる。

以下、夕食時の交歓風景(「日中交流」は別掲)を拾って寸描。

2月3日(節分の夕、在泊中の韓国学生一行と日本の学生計八グループ一九〇名が交流。両国の「年男」学生が元氣いっぱい「福はウチ、鬼はソト」と食堂いっばいに豆をまくと、全員がこれに唱和、なごやかな一刻を楽しんだ。

2月6日(週末の夕食時に八グループ二二名が交歓。久々に来館された日大法学部・川西誠名誉教授がスピーチの中で「一〇年ほど前の大雪の日の合宿の思い出などを話された。

2月20日(在泊一〇グループ一六九名が交流。都立大経済学部・金子ハルオ教授も当ハウスでの合宿のよろこびについてスピーチされた。聖心女子大E.S.S.クラブが珍しい英語の歌を、明学大グループの五四名が迫力溢れるコーラスを披露。最後に全員が合唱。

●3月1春休みの多彩な合宿



東芝若手技術者による記念植樹

(第3群宿舍村)

(前ページよりつづく)

つづいて、昭和57年度の国際プログラムについて、まず第9回国際学生セミナーの企画の前提となる新しい総合テーマの設定をめぐって活発な意見が交換された。日本が第一次大戦から第二次大戦を経て、イデオロギーの対立、戦争、敗戦、経済再建などの問題をどのように考え解決し、また解決しなければならぬのか。こうして日本のケース・スタディを手はじめに、今や全世界的に求められている「発展と平和」のモデルを模索し考察していくことをねらいとして、「発展と平和のモデルを求めて」を今後四回にわたるシリーズの総合テーマとし、第9回セミナーはその第1回のテーマとして「日本再考」をかかげることに決定した。

最後に、任期満了に伴う委員の

改選をめぐり、新委員の人選を含む委員会構成を議し、20時半閉会した。

【出席者】 中嶋嶺雄、広野良吉、三輪公忠、山代昌希、阿部美哉、金山宣夫、菊地靖、熊田禎宣、浜西栄一(敬称略)

■大学教員懇談会準備委員会

正式委員会の

発足をめざす

昭和57年3月25日(私学会館) 昭和45年の第1回開催以来、当ハウスの継続したプログラムにあってきた「大学教員懇談会」のより一層の恒常的活動をめざし、かねてより懸念となっていた同常置委員会設置のための準備委員会が開かれた。別記のとおり、同準備委員会委員長井早康正氏他七名の委員および中川館長以下ハウス側四名の出席のもとに、正式委員会

近い。松田武彦教授は昨年学長に就任後もこのセミナーの指導を続けられておられ、今回の合宿にも忙中参加された。

例年この月は個別大学の枠を超えた諸集會が目立つ。当ハウス主催の大学共同セミナー、合同セミナー(ともに別掲報告)や学生年輪の会「春のつどい」、インド卒業研究発表会、統計数学若手研究会、そして大学の現象学では東西一〇大学が参加の現象学の社会学研究会や、全国一〇大学からの院生が仏人教師と九泊した第3回大学院仏語セミナーなど、いずれも春休みを利用した複数大学連合の合宿であった。

この月の利用グループは一二五、宿泊延人数は五、五四三人。

発足のための内規案が井早委員長より提案され、活発な審議のすえ、呼称を「大学教員懇談会企画委員会」とするなど、一部修正の上、これを承認、近く開催の常務理事会上程、承認を得たのち、委員の選出など正式委員会の発足にかかるとなった。

また席上、今秋開催を予定の第19回大学教員懇談会のテーマをめぐり論議が交わされた結果、「国際化時代の大学」が選ばれた。さらに年一回の懇談会のはかに、随時教員間の意思の交流、情報の交換をはかるための小規模な集會を計画してはどうかなどの提案もあり、次回にそれぞれ具体策を持ち寄ることを決め、定例会を開いた。

【出席者】 井早康正、村田喜代治、大川信明、川村亮、小池生夫、小林善彦、関口利男(代)、三宅彰(敬称略)

ちなみに当ハウスのこの一年間(56年度)の利用状況を数字で示すと、利用件数一、一六七、宿泊実人数三万一、六八九人、同延人数五万四、五四七人となる。宿舍の利用率は五七％である。詳しい年間報告は次号に掲載される。

以下、3月の記念植樹二題。

3月5日(一泊で合宿研修の東芝グループ(プロセッサソフトウェア)の若手技術者四四名が、第3群宿舍村の斜面にハナミズキを記念植樹(上掲写真)。なお、同グループ、翌朝は朝食前の三〇分間、全員ビニール袋を片手にキャンパス一巡の清掃奉仕をされた。3月14日(電気通信大経営工学科・狩野紀昭助教授と学生三〇名が、当ハウスでの合宿一〇周年を



記念して、長期セミナー館前にキンモクセイとサザンカ計三株を植樹された。

❖ わたしたちの合宿 ❖  
自由な創造の時間  
合同ゼミ合宿の収穫

自由な創造の時間

合同ゼミ合宿の収穫

肌にしみ透るように澄んだ空気の中に、白い稜線をくっきり描いている富士を背に、鶴見大学英文科の合同ゼミは、1月30日に最後の記念撮影を行った。鶴見大学の職を、この春退くことになったからである。思えば四年の卒論指導を年に二度、三・四年合同合宿ゼミを一度、定例のようにゼミナー・ハウスで行うようになってから、六年の年月が経ってしまった。クラスで行う毎週の卒論個別指導で作品を読み終え、目次立てもできて書く内容がほぼ決まる夏の頃、私の受け持つ毎年約一二名の学生は、八王子の林の中に閉じ籠り、徹底的に討議を行って、実際に任意の一章を必ず書くことにしている。この夜ばかりは縮切りに追われる作家同様の体験を味わうことになる。だが書き上

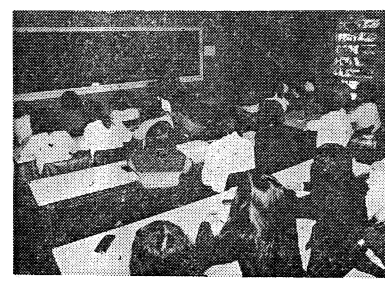
が参加している。

合宿紹介 鶴見大・井村ゼミ

昭和51年に鶴見大が協会員校に加入されてからは、毎年定例的に合宿を続けてこられた同大英文科の井村ゼミが、今年1月末に「鶴見大・井村ゼミ」としては最後の合宿を実施された。ご指導の井村君江教授が、海外での研究を前に、この春同大を去られることになったためである。最終日の朝、卒業をひかえた四年生に、贈

げた解放感はずいぶん、翌日は林の中を歌いながら散策したり、ピンポンやバドミントンで飛び廻ったりの楽しい日に早変わりしている。

二度めの合同合宿は卒論提出の後、二年生を前に卒論執筆の体験や苦心、書いた内容を語ることになるのだが、実際に苦勞した者だけが物事の真の意味を語れるわけ、聞く三年生の側から言えば、そうした先輩の体験談は、執筆者心得といった抽象的なものからはずれられぬ、まさにナマの貴重な話



卒業前の合宿で井村教授の励ましの言葉をきく(大セミナー室)

ることは、をのべ、学生と最後の記念撮影に加わった同教授も、この日は、多くの学生たちとともに過ごしたこの丘での合宿を、ふり返っておられたことであろう。本号の「わたしたちの合宿」欄では、井村教授にお願いし、同合宿の思い出などをお分かちいただくことができた。今後、鶴見大のできるだけ多くの方々が、井村ゼミと同様の体験を持たれることを、当ハウスは心から願っている。

寄付金報告

57年2月～3月

- 教育プログラム資金
1. 参加者一同 9,000円
2. 第三回大学合同ゼミナ
3. 参加者一同 2,000円
4. 第一一八回大学共同ゼミナ
5. 参加者一同 7,280円
6. 第一一八回大学共同ゼミナ
7. 参加者一同 5,000円
8. 参加者一同 5,000円
9. 参加者一同 10,000円
10. 参加者一同 10,000円
11. 参加者一同 2,000円
12. 参加者一同 2,000円
13. 参加者一同 8,900円
14. 参加者一同 5,000円
15. 参加者一同 5,000円
16. 参加者一同 5,000円
17. 参加者一同 5,000円
18. 参加者一同 5,000円
19. 参加者一同 5,000円
20. 参加者一同 5,000円

- 植樹資金寄付
1. 10,000円
2. 10,000円
3. 10,000円
4. 10,000円
5. 10,000円
6. 10,000円
7. 10,000円
8. 10,000円
9. 10,000円
10. 10,000円
11. 10,000円
12. 10,000円
13. 10,000円
14. 10,000円
15. 10,000円
16. 10,000円
17. 10,000円
18. 10,000円
19. 10,000円
20. 10,000円

アジア学生文化協会殿

- 「大学研究ノート」51・52号
「Innovation in Higher Education」1981 「大学論集」第10集
広島大学教育研究センター殿
「早稲田フォーラム」、「学生の手帳」
「国際協力」11・12月号
「納税者の権利」 北野弘久殿
「学習院学術研究叢書」第8号
「会報」94・95号 国立大学協会殿
「神奈川大学通信」135・136号
「同志社時報」71号 同志社大学殿
「二階堂学園六十年誌」
「AJA L T」日本女子体育大学殿
「八王子の結婚」婦人センターの十五年」八王子市婦人センター殿
「一般教育学会誌」一般教育学会殿
「日本の住生活」 朝倉書店殿
「アダージョ」 紺屋 栄殿
「テレビ番組の国際交流」 国際交流基金殿
「現代世界のインフレーション」 法政大学国際交流センター殿
「第24回工学院大学院研究発表講演要旨」、「工学院大学院研究報告」51号、「工学院大学院研究論叢」19号 工学院大学図書館殿
「楽土残照」Asian Book Development」2・3号
ユネスコ・アジア文化センター殿
「ケインズ」一般理論の再構築」 平井俊顕殿
「渡辺学園百年史」 東京家政大学殿
「現代詩研究」303号
(11ページ1段めへつづく)

寄贈図書

56年11月～57年3月

- 「各国議会制度論」 斉藤 寿殿
「アジアの友」9～12

中国人日本語教師団を迎えて

日中交流、貴重な体験の八日間

昭和57年2月24日～3月4日

早春の2月下旬から3月のはじめにかけて、当ハウスは中国各地の大学で日本語教育に従事する中国人教師一二〇名と随員七名の来泊を迎えた。

来泊二日目、2月24日の夕食時に、在泊の四グループ(一行のほかに、在泊の四グループ)一行のほかに、来日オーストラリア留学生)計二〇〇名が交歓。中国人一行から日本人顔負けの巧みな日本語のスピーチがあれば、忙中駆けつけて来られた当ハウス国際プログラム委員会委員長・中嶋嶺雄教授が日中両国語で歓迎のあいさつ。このあと、日・豪・中国の順で楽器演奏や歌謡の披露と、おのずからの国際交流。中でもハイライトは研修生の王虹氏(北京冶金機電学院)による演歌「北国の春」と、これに呼応しての小泉聖子さん(東京外大中嶋研究室、大学院生)

の中国語による歌「北風吹いて」の応酬で、満場の傾聴と拍手をよんだ。最後は中国人も愛唱の「四季の歌」の合唱で、心の交流をたしかめ合った。

3月1日の夜は、講堂に特設の舞台上で日本舞踊、華道、茶道のデモンストレーションが行われた。千人会員矢内宗紫先生と花柳流花柳左俊先生および地元有志の方々のご奉仕によって実現したもの。お茶は全員が手ほどきを受けたが、これには心からのもてなしの感謝のことが述べられた。

3月4日朝、一行は三台のバスで離館、次の訪問先へ移ったが、出発時にはわれわれと車上の研修生とが、手を振り合い別れのことばを交わした。後日感想文が寄せられたが、以下そのうちの三篇をいずれも原文のまま紹介したい。

謝辞！ 忘れぬ印象

上海外国語学院 梁 伝 宝

大学セミナー・ハウスで八日間を過して、この大家庭のような暖ましい雰囲気と森に囲まれた静かな環境が印象に残りました。こ

こでの自主生活は私にとって忘れがたいものです。みんなと一緒に集中的に聞いた講義、見学に行った先々、見せてくださった日本舞踊、花道、茶道のデモンストレーション、いずれも印象深いものでした。日本の大学生、オーストラリアの学生との交流はいっそう大家庭のような暖ましい雰囲気を作り上げました。こういったふうな雰囲気はきっと若者の精神を健全に成長させるのに大いに役立つものでしょう。ここはまわりが静かで、景色がきれいですし、大學生のセミナーにとって理想的な環境ではないかと思われまします。雪に中国にもこのようなセミナー・ハウスができたなら、学生さんに喜ばれるでしょう。

大連外国語学院 王 東 生

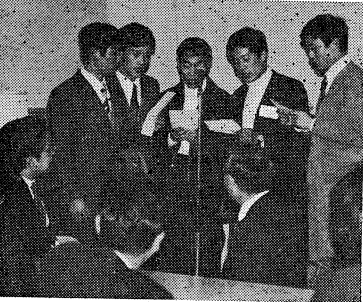
この八王子大学セミナー・ハウスに来ると聞いては、北京の研修センターで聞いていました。が、どういふ所かは、日本人の先生方もはつきりとは知らないというものでした。ところが、私たちの受けた第一印象はともすればらしいものでした。「天公作美」という中国の譬えのように、朝起きると見るに山一面の銀世界です。交友館からは遠く遙かに真白な頂きをしてはいる富士山が見えるではありませんか。私たちは朝日を浴びながらシャッターをおし記念写真を撮りまくりました。こういう雪景色はこの東京でも珍しいとのことと、本当によくしたものだと思

国際関係学院 周 秀 麗

セミナー・ハウスは緑に囲まれ、静かでとても美しい自然環境の中にあり、都心ではとうてい味わえないものがあります。雪におおわれて、一面銀世界に変わったセミナー・ハウスの雪景色は実に美しいものでした。

しかし、それにもまして印象的だったことは、なんとといっても館長をはじめハウスのスタッフの皆さん方がたいへん親切にして下さったことと、真心こめてあたたかく私たちを迎えて下さったことです。私たちが少しでも楽しく滞在できるようにいろいろと気を配り、映画会、交歓会、それから日本の伝統ある茶道、華道、舞踊の観賞会など豊富多彩なプログラムを組んで下さいました。こんな暖かくて、深いおもいやりに私たちがすっかり感激し、心から感謝しております。

国へ帰ったら、私たちは自分の目で見たこと、肌で感じたことをありのまま国のものに伝え、日本に対する理解を深め、日中友好のためにいっそう努力して、みなさんのご厚意に応えたいと思いをいたしました。



日中交流のスナップから

- 〈上〉 初日の開講式風景 (講堂)
- 〈中〉 生け花や茶道の実演会場 (講堂)
- 〈下〉 交歓会でお国の歌を披露する研修生たち (食堂)

(9ページよりつづく)

現代詩研究所殿

「北京烈烈」(H)

「現代デザイン入門」 勝見 勝殿

「紀要」第13集

日本大学精神文化研究所殿

「大学時報」163号

日本私立大学連盟殿

◆千人会

昭和56年12月〜昭和57年3月

◇現在会員は一、六五七名です

大学人Ⅱ一、二四三名

社会人Ⅱ 四一四名

◇新しく会員となられた方々

四名(第62回報告(申込順))

足立保健所 佐藤 正喜殿

明治大学企画室 大森 東亜殿

B 順天堂大学教授 浅見 一羊殿

B 専修大学教授 竹林 代嘉殿

◇会費ありがとうございます

外池孝雄、高橋浩爾、田村光三、

笠井貴征、新井益太郎、木村久男、

山下幸夫、江上不二夫、中尾由矩

子、奥繁正男、水佑次郎、西巻正

郎、高橋正男、岡本敏雄、大内英

吾、竹内与之助、佐藤公子、大谷

楨之介、相馬勝夫、安味貞正、茂

木誠陸、石川明、矢澤修次郎、内

藤正、清水誠、吉永フミ、池上秋

彦、慶伊富長、高橋康之、和田木

松太郎、宮本勉、小西正捷、有山

正孝、絆川羔、岡崎正、平山美枝

子、山科高康、尾田幸雄、茅山登

子、浮田久子、鈴木喬、深沢宏、

佐藤正喜、三戸公、沢孝一郎、宮

川松男、築地整、平松幸一、三浦

安子、薄衣佐吉、伊藤文人、杉山

吉茂、木村敏美、石田孝夫、横沼

健雄、濱川祥枝、塚本利明、来住

「青年の国際理解に関する意識調

査」国立オリンピック記念青少年

総合センター殿

「政治経済史学」188

政治経済史学会殿

「科学と私」Ⅱ

東京理科大学特別教室セミナー殿

正三、竹内啓一、吉田光孝、大川

信明、篠沢公平、西田亀久夫、大

倉謙二、半谷高久、山田耕司、山

鹿誠次、三井為友、三浦永光、杉

山好、福原満洲雄、上田明子、佐

々木邦彦、池田貞雄、高橋恒郎、石

加藤利勝、竹中肇、岩尾裕純、石

井不二雄、山田圭一、徳座晃子、

清水啓三郎、加藤信朗、川端香男

里、沼田滋夫、市川孝正、天野成

光、遠藤健治郎、中尾信之、若林

俊輔、大橋方知江、関正彦、笠原

正成、瀬川渡、友部直、青柳総太

郎、中野卓、飯田芳男、竹村研一、

池田温、水野悦子、中鉢正美、桑

原哲郎、岩永達郎、三宅義夫、吉

田裕、示村悦二郎、平木典子、玉

田啓八、隈部直光、福島杉夫、小

菅敏夫、大塩俊介、小林哲也、森

田豊夫、森山俊雄、瀬野信子、川

本茂雄、宮野彬、園田義道、武藤

義夫、後藤聰一、相原光、高橋源

次、田中英夫、伊藤学、西川大二

郎、一番ヶ瀬康子、岡田清、川崎

正三、松山正男、石塚司農夫、大

羽滋、若林真雄、師岡孝次、深沢

実、白井泰四郎、乾崇夫、小谷正

雄、斉藤耕二、徳久球雄、大森東

亜、大内英吾、新井明、磯村英一、

福本日陽、浦上要三、慶高壽信、

河田敬義、古田勝久、根岸愛子、

佐藤美喜子、光延明洋、石井明、

谷口修、萩原玉味、茅野良男、本

谷勲、室俊司、刈田元司、北原文

雄、本田和子、伊藤洋、小川洋輔、

篠崎武、松元三郎、村井孝子、北

村嘉行、加倉井茂樹、川喜田愛郎、

松原元一、澤本孝久、中利太郎、

原正彦、小山弘志、鈴木皇、金子

克美、中山知雄、関口晃、高橋昭

三、上谷琢之、広瀬一彦、村上泰

治、橋本トク、磯野修、永積昭、

玉野井芳郎、東川清一、内山正熊、

富沢賢治、山田辰雄、武田昌輔、

木村康雄、飯田修一、清水畏三、

京極純一、山崎俊雄、山田昭房、

山口俊夫、谷資信、原増司、平川

紀一、田上稜治、渡辺忠胤、佐藤

弦、吉田耕作、伊藤千秋、小林清

子、公文俊平、吉田公保、東洋、

石井正博、小俣武夫、金子ハルオ、

平岡勇、小川政亮、松田正一、新

保清子、花井増実、遠藤平治、岩

佐凱美、島田外志夫、上山碩、下

川浩一、仙田哲、遠藤並治、柳父

園近、矢田俊文、遠藤卓夫、田辺

留次郎、中岡二郎、大岡信、今井

清一、板垣雄三、小泉仰、久保亮

五、西田貴子、櫻崎彰男、勢山秀

子、松島千代野、青井和夫、岩崎

代志治、牧野誠一、大頭仁、高松

正昭、西村章子、高村新一、山田

暉、三神勲、池川郁子、笠耐、森

昭彦、野沢辰、窪田庄十郎、馬越

徹、黒沼裕、石堂常世、中村妙子、

猪瀬博、今井裕之、本間仁、崎野

滋樹、増沢利幸、原田敬一、平野

由紀子、磯直道、井原恵治、佐藤

百世、佐藤直子、中村孝之、山澤

逸平、福永寿己夫、彦由一太、島

美喜子、大村晴雄、梅村魁、最上

武雄、内山力、高橋誠、那須宗一、

玉川一郎、富子勝久、杉山逸男、

宮腰賢、渡辺武雄、藤卷正生、牛

島忠広、井村君江、佐藤毅、中田

良平、一松信、瀬部孝、永野賢、

松澤正夫、原芳男、熊澤義宣、五

唐勝、平野鉄太郎、村松林太郎、

勝見允行、人見宏、角尾勉、土瀬

宏、浅見一羊、山田良之助、土井

惠美子、白川和雄、吉田宏哲、木

村建一、寺中良二、箱木眞澄、寺

内礼治郎、大泉充郎、細井勉、松

尾弘、松井賢夫、島田治夫、西村

閑也、石原忠男、鴨澤巖、林潔、

平田道憲、柘植敏治、大西清、市

川邦彦、工藤英明、栗原俊記、斎

藤眞、藤本宏幸、丸山真男、池田

義人、横田忠夫、加藤六美、天野

一夫、進藤トク、望月清司、守屋

美賀雄、野田倬、池原義郎、高瀬

文志郎、佐野厚子、萩原稔、柴田

泰比古、熊坂敦子、佐藤公孝、小

山五郎、田所光子、高橋潤二郎、

村田晴夫、護雅夫、春田素夫、蓮

見音彦、絹川正吉、瀬川美能留、

小林文男、竹林代嘉、大田末穂、

渡利千波、小林望、松崎義徳、岡

村総吾、三上次男、仁科雄一郎、

斉藤幸一郎、脇田良一、太田淳一、

寿里茂、大塚正夫、福西基、村井

実、小川仁、井上百合子、富岡幸

雄 以上

●利用状況

\* 11月2日利用  
\* 11月3日利用  
日帰り利用者を除く

11月

(101グループ、延四、七九二)

青山学院大学助教授 武藤 元昭

青山学院大学助教授 笹森 健

中央大学教授 古坂 利明

中央大学教授 矢部 浩祥

明治大学教授 池上 秋彦

明治学院大学教授 三和 治

文教大学講師 美川 漢子

青山学院大学助教授 寺東 寛治

中央大学助教授 石川 敏行

法政大学講師 神山 安雄

法政大学助教授 川西 誠

日本大学名誉教授 佐藤 和男

青山学院大学教授 田中 義久

明治大学教授 田中 政男

法政大学教授 麻生 幸

千葉商科大学教授 谷敷 正光

駒沢大学助教授 小林幸一郎

東洋大学教授 池田 正孝

中央大学教授 池田 正孝

法政大学ユースホステル研究会

駒沢大学美術部

成城大学助教授 鈴木日出男

中央大学講師 古野 豊秋

明治大学教授 原 正彦

上智大学教授 永井 道雄

法政大学教授 尾形 憲

早稲田大学ポルタージェ研究会

早稲田大学生活協同組合

早稲田大学助教授 岩崎代志治

神奈川大学助教授 橋本 侃

早稲田大学国際学生友好会

駒沢大学電気美術研究部

東京都立大学助教授 大塚啓二郎

明治大学教授 牧野 誠一

工学院大学講師 加藤 尚武

東京都立大学助教授 小林 良二

駒沢大学フライ研究會

明治学院大学グリークラブ

東京都立大学教授 金子ハルオ

東京学芸大学教授 大久保典夫

聖心女子大学ESSクラブ

武蔵大学リーダーズ・キャン

東京都立大学学生相談室

東京大学・東京都立大学・立教大

学合同西洋経済史研究会

横浜国立大学体育系サークル指導

者セミナー

明治学院大学助教授 吉原 功  
 東京経済大学助教授 古川 純  
 学習院大学助教授 岡田 守弘  
 駒沢大学助教授 小林 英夫  
 国際商科大学アラブ研究会  
 横浜商科大学助教授 C・P・F  
 女子聖学院短期大学助教授  
 山梨県立女子短期大学助教授

阿部真美子  
 稲毛 教子  
 米山 弘  
 斎藤 忠義  
 三井須美子  
 川上 則道  
 志村 正  
 綿貫 芳源

東京観光専門学校ESクラブ  
 都留文科大学助教授  
 都留文科大学助教授  
 創価大学講師  
 独協大学教授  
 日韓学生親善セミナー\*\*  
 全関東学生商業英語連盟  
 自然災害特別研究会  
 万国ロー・パブテラスト福音伝道  
 本協会

東京松本英語専門学校  
 YFU日本協会\*\*  
 日本電気\*\*\*

キンカ堂  
 東京芝浦電機  
 マンナンフーズ  
 日野協力会  
 京王百貨店  
 小西六写真工業  
 テンスター開発  
 日出島製版所  
 埼玉銀行従業員組合\*  
 沖電気  
 J・W・トンプソン・ジャパン  
 第一相互銀行  
 田村電機  
 日本機械デザインセンター  
 〔個人利用〕  
 東京学芸大学名誉教授  
 東京学芸大学教授\*  
 立教大学教授  
 3月  
 (125グループ、延五、五四三人)  
 東京都立大学教授 清水 誠  
 東京都立大学社会学研究室  
 法政大学助教授 岡本 義行  
 東京農工大学自己開発セミナー  
 横浜国立大学助教授 天川 晃  
 東海大学助手 木谷 弘子  
 東京薬科大薬理学教室\*\*\*  
 武蔵工業大学体育会指導者養成講  
 会科学のリアリティとはー方法と  
 しての近代西欧としてアメリカー  
 (佐和隆光氏)  
 千葉大学教授 伊東光晴氏  
 東京外国語大学教授 山之内靖氏  
 ▼第9回国際学生セミナー  
 主題 発展と平和のモデルを求め  
 てー日本再考ー  
 期日 昭和57年10月29～31日  
 ▲運営委員▼  
 国際基督教大学教授 横田洋三氏

習会  
 武蔵大学教授 横山 定雄  
 立教大学教授 早坂泰次郎  
 慶応義塾大学英語会  
 明治大学教授 飯田 喜介  
 成蹊大学文化会リーダーズ・キャ  
 ンプ  
 東京都立大学教授 赤木須留喜  
 東京都立大学教授 奥山 典生  
 東京工業英語会話研究会  
 電気通信大学助教授 松田 武彦  
 日本大学法学部文学友の会  
 明治学院大学物理学研究会  
 明治学院大学人形劇団ZOO  
 早稲田大学講師 小森 光徳  
 東京学芸大学助教授 小町谷照彦  
 国際基督教大学講師 伊藤 喜栄  
 一橋大学生活協同組合  
 東京学芸大学助教授 林 勉  
 東京学芸大学助教授 小林 弘  
 立教大学ニュークリアー  
 早稲田大学示村・内田研究室  
 青山学院大学教授 岸 英朗  
 早稲田大学教授 大槻 義彦  
 中央大学白門司法会計研究会\*  
 法政大学助教授 高橋 清夫  
 芝浦工業大学助教授 高橋 清  
 立教大学物理自主ゼミナール  
 成城大学教授 中西 進  
 法政大学教授 藤川 昌弘  
 慶応義塾大学助手 田村 俊作  
 東大比較文学・比較文化研究室  
 東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄  
 早稲田大学教授 田村 恭  
 中央大学美術倶楽部  
 東京経済大学経済政策研究会  
 法政大学経済学術恐慌論研究会  
 早稲田大学教授 西宮 輝明  
 早稲田大学理工EES  
 明治大学現代社会を考える会  
 日本大学教授 石山 伍夫

明治学院大学教授 橋本 敏雄  
 専修大学教授 望月 清司  
 中央大学経済学会  
 専修大学教授 田路 健一  
 青山学院大学教授 坂井 正廣  
 慶応義塾大学教授 西川 俊作  
 慶応義塾大学教授 十時 殿周  
 東京大学助教授 見田 宗介  
 慶応義塾大学ビプリオメトリック  
 ス研究会  
 千葉大学医用電子工学研究会  
 駒沢大学眺法会  
 駒沢大学教授 石井 啓雄  
 中央大学教授 岩尾 裕純  
 専修大学教授 竹林 代嘉  
 普通士学園  
 東京YWC A専門学校  
 東京デザイン学院  
 和光大学生活協同組合  
 横浜商科大学助教授 平野 文彦  
 東邦大学教員養成研究会  
 東京電機大学学生赤十字奉仕団  
 玉川大学助教授 渡辺 康磨  
 職業訓練研究センター  
 関東学院大学教授 加藤 俊作  
 国際商科大学講師 氏井 巖  
 明星高等学校  
 渋谷女子高等学校  
 インド卒論研究発表会  
 現象学的社会学研究会  
 学生年輪の会「春のつどい」  
 第15回統計数学若手研究会  
 語学教育振興会  
 国際プログラムの委員会  
 日本国際連合学生連盟  
 第3回国際合同セミナー  
 第18回大学共同セミナー  
 政治経済史学会  
 YFU日本協会  
 東京松本英語専門学校  
 朝日カルチャーセンター

文学教育研究者集団  
 英語教育協議会  
 日本電気\*\*  
 小西六写真工業  
 東芝プロセスソフトウェア  
 日本電気コストコンサルティ  
 ング\*\*  
 田村電機  
 京王百貨店\*  
 レヴセン  
 日本能率協会  
 日本大洋海底電線  
 スリーポンド  
 ヒノキ新薬  
 沖電気  
 三菱電機  
 興亜火災海上保険  
 雪印物産  
 〔個人利用〕  
 早稲田大学講師 小林 宏一  
 共立女子大学助手 近藤 純代  
 女子聖学院短期大学助教授  
 早稲田大学教授 小倉 義明  
 川原 栄峰

編集後記

56年度のセミナー活動その他の事業報告は次号にお読みいただくとして、おおむね所期の成績をあげたことを喜ぶと同時に、何事も協力会員校の手厚いご支持、ご協力あつての計画であり成果であることの認識を深くする。毎度のことだが、セミナーに参加した学生諸君から寄せられる感想が私たちを励まし考えさせる。本号で有馬さんの言うとおり、「そこ」から先は自分で考え創っていくことだ。ハウスが、そうした物事に対する原初的自覚への契機を与える場たりうるならば、これこそハウスの本望というべきである。(岡山)

▼第3回大学院共同セミナー  
 主題 創造現場の社会科学  
 ー学問方法論の具体化をめざしてー  
 期日 昭和57年7月2～4日  
 ▲主題講演▼  
 専修大学教授 内田義彦氏  
 ▲セクション演習▼  
 A現代経済学と現状分析のはざま  
 で(伊東光晴氏)／B疎外論を考  
 え直すーマルクス・ウェーバー・  
 パーソンズー(山之内靖氏)／C社

会科学のリアリティとはー方法と  
 しての近代西欧としてアメリカー  
 (佐和隆光氏)  
 千葉大学教授 伊東光晴氏  
 東京外国語大学教授 山之内靖氏  
 ▼第9回国際学生セミナー  
 主題 発展と平和のモデルを求め  
 てー日本再考ー  
 期日 昭和57年10月29～31日  
 ▲運営委員▼  
 国際基督教大学教授 横田洋三氏

武蔵大学教授 横山 定雄  
 立教大学教授 早坂泰次郎  
 慶応義塾大学英語会  
 明治大学教授 飯田 喜介  
 成蹊大学文化会リーダーズ・キャ  
 ンプ  
 東京都立大学教授 赤木須留喜  
 東京都立大学教授 奥山 典生  
 東京工業英語会話研究会  
 電気通信大学助教授 松田 武彦  
 日本大学法学部文学友の会  
 明治学院大学物理学研究会  
 明治学院大学人形劇団ZOO  
 早稲田大学講師 小森 光徳  
 東京学芸大学助教授 小町谷照彦  
 国際基督教大学講師 伊藤 喜栄  
 一橋大学生活協同組合  
 東京学芸大学助教授 林 勉  
 東京学芸大学助教授 小林 弘  
 立教大学ニュークリアー  
 早稲田大学示村・内田研究室  
 青山学院大学教授 岸 英朗  
 早稲田大学教授 大槻 義彦  
 中央大学白門司法会計研究会\*  
 法政大学助教授 高橋 清夫  
 芝浦工業大学助教授 高橋 清  
 立教大学物理自主ゼミナール  
 成城大学教授 中西 進  
 法政大学教授 藤川 昌弘  
 慶応義塾大学助手 田村 俊作  
 東大比較文学・比較文化研究室  
 東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄  
 早稲田大学教授 田村 恭  
 中央大学美術倶楽部  
 東京経済大学経済政策研究会  
 法政大学経済学術恐慌論研究会  
 早稲田大学教授 西宮 輝明  
 早稲田大学理工EES  
 明治大学現代社会を考える会  
 日本大学教授 石山 伍夫

明治学院大学教授 橋本 敏雄  
 専修大学教授 望月 清司  
 中央大学経済学会  
 専修大学教授 田路 健一  
 青山学院大学教授 坂井 正廣  
 慶応義塾大学教授 西川 俊作  
 慶応義塾大学教授 十時 殿周  
 東京大学助教授 見田 宗介  
 慶応義塾大学ビプリオメトリック  
 ス研究会  
 千葉大学医用電子工学研究会  
 駒沢大学眺法会  
 駒沢大学教授 石井 啓雄  
 中央大学教授 岩尾 裕純  
 専修大学教授 竹林 代嘉  
 普通士学園  
 東京YWC A専門学校  
 東京デザイン学院  
 和光大学生活協同組合  
 横浜商科大学助教授 平野 文彦  
 東邦大学教員養成研究会  
 東京電機大学学生赤十字奉仕団  
 玉川大学助教授 渡辺 康磨  
 職業訓練研究センター  
 関東学院大学教授 加藤 俊作  
 国際商科大学講師 氏井 巖  
 明星高等学校  
 渋谷女子高等学校  
 インド卒論研究発表会  
 現象学的社会学研究会  
 学生年輪の会「春のつどい」  
 第15回統計数学若手研究会  
 語学教育振興会  
 国際プログラムの委員会  
 日本国際連合学生連盟  
 第3回国際合同セミナー  
 第18回大学共同セミナー  
 政治経済史学会  
 YFU日本協会  
 東京松本英語専門学校  
 朝日カルチャーセンター

文学教育研究者集団  
 英語教育協議会  
 日本電気\*\*  
 小西六写真工業  
 東芝プロセスソフトウェア  
 日本電気コストコンサルティ  
 ング\*\*  
 田村電機  
 京王百貨店\*  
 レヴセン  
 日本能率協会  
 日本大洋海底電線  
 スリーポンド  
 ヒノキ新薬  
 沖電気  
 三菱電機  
 興亜火災海上保険  
 雪印物産  
 〔個人利用〕  
 早稲田大学講師 小林 宏一  
 共立女子大学助手 近藤 純代  
 女子聖学院短期大学助教授  
 早稲田大学教授 小倉 義明  
 川原 栄峰